

カナダ極北地域に生きるイヌイット

—生活の現状と問題

岸上伸啓 (国立民族学博物館)

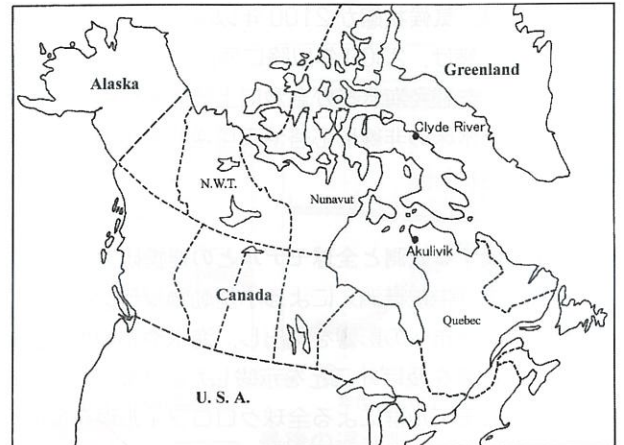
カナダ極北地域に住むイヌイットは、かつて「エスキモー」と呼ばれ、冬には海氷上でアザラシを狩り、雪の家に住み、犬ぞりを駆って旅をする狩猟民として世界中の人々によく知られている。しかし20世紀に入り、外部社会との接触が密になるにつれ、彼らの生活は急激に変化を遂げた。現在、私たちが目にするのは、私たちと同じようにシーズンをはき、ハンバーガーやパスタを食べ、西洋型住宅に住み、ビデオ・ゲームを楽しみ、フェイスブックのようなSNSを利用して家族や友人たちと連絡を取っている姿である。それは、欧米系カナダ人の姿と大きく変わるものではない。その一方で彼らはイヌイットとして独自のアイデンティティを持ち続けながら、特徴のある生活を営んでいる。

現在、カナダのイヌイットの総人口は約7万人であり、おもにヌナヴト準州やヌナヴィク地域（ケベック州極北地域）、北西準州、ヌナチャック地域（ラブラドル地域）にある約50村およびオタワやモントリオール、エドモントンなどのカナダ南部地域で暮らしている。ここでは、私の調査地であるケベック州極北部のハドソン湾沿岸に位置するアクリヴィク村でのイヌイットの生活の現状と彼らが直面している問題について紹介する。なお、2022年現在、村の総人口は、約650人であり、同村の住民の90%以上がイヌイットである。

イヌイットの村の様子

アクリヴィク村は小さな村だが、カナダ連邦政府やケベック州政府、北ケベック生協連合などの援助によって、村役場、小中高の学校、教会、村の体育館、警察駐在所、看護所、生協の店舗、ノーザンストア、飛行場、発電所、石油備蓄タンクなど基本的な施設がそろっている。

大半のイヌイットは住宅を個人で所有するのではなく、ケベック州住宅公社が運営・提供する賃貸の一戸建てやアパートに住んでいる。暖房設備や貯水槽、燃料タンクが備わっている各住宅にはキッチン、居間、トイレ・バスルーム、複数の寝室があり、イヌイットはテレビや冷蔵庫、電気オープン、食洗器、洗濯機、PC、電話機、ベッド、タ



地図1. カナダ極北地域とアクリヴィク村の位置



写真1. アクリヴィク村 (2016年11月, 岸上伸啓撮影)

ンスなど私たちが使うのと同じような機器や道具を利用している。私たち日本人よりもはるかに新しい家電や道具を所有し、利用しているように感じるくらいである。

電気は村の発電所から家々に配電されているが、冬は極寒のため水が凍結するので水道や下水道はない。このため、村の配水車が定期的に家々をまわり、各住宅の貯水槽に給水していく。生活排水や排泄物は住宅の汚水槽に一時的に貯蔵され、村のパキュームカーが週に1度やってきて取っていく。ゴミも週に2度ほど村のゴミ収集車が各住宅から回収し、郊外にあるゴミ捨て場に運び、野焼きする。



写真2. 村の中を走るスノーモービルと自動車 (2016年11月 岸上伸啓撮影)

道路網として村内の目抜き通りと村から飛行場や給水所、ゴミ捨て場に向かう道路があるが、舗装されていない。冬場は積雪のため、かなりの頻度で除雪車が出動し、除雪する。イヌイットの人たちは、船外機付きカヌー、スノーモービル(スキドゥー)、四輪駆動バギー、自家用車やトラックなどの自動車を地元の移手段として利用している。カヌーは夏の海上移手段として、スノーモービルは冬の雪上移手段として、四輪駆動バギーは春から秋にかけての陸上移手段として利用される。自動車は村内およびその周辺で1年中使用される。彼らが隣村を訪問する時には船外機付きカヌーやスノーモービルを利用することがあるが、大半は飛行機の定期便を利用する。なお、現在のイヌイットの村では競技用、娯楽用、観光用以外では犬ぞりは利用されていない。

衣類と食事

かつて野外で活動することが多かったイヌイットは、カリブー皮製のフード付きパルカとズボン、アザラシ皮製の靴と手袋を着用していたが、欧米製防寒着などの既製品を生協の店舗においてや通販によって手に入れることができるようになると、村内の生活ではそれらを着用ようになった。また、彼らは羽毛の詰まったダッフル製パルカなどを作り、晩秋から初春にかけての寒い時期には防寒着として利用している。家の中は暖房されているため、真冬でも半袖のシャツで過ごすことができる。ただし、冬に村から離れた所に狩猟や漁労に行くハンターは伝統的な毛皮製のパルカとズボンを着ることがある。

食事はこの半世紀の間に地元産の肉や魚を中心とした食材にカナダ南部から運搬されてくる加工食品、牛肉・豚肉・鶏肉、果物や野菜の生鮮食品などが加わった。私が現地調



写真3. 村の中を歩く子供たちの服装 (2016年11月 岸上伸啓撮影)

査を始めた1980年代前半には、中高年以上が世帯主である家では毎食、地元産の生魚、生肉、煮込んだ肉などを食べ、食後にはバノックと呼ばれる無発酵パンと大量の砂糖を入れた紅茶を飲食していた。この40年あまりのうちに食生活も大きく変わった。かつてはお腹がすいた時に食事をしていたが、現在では朝昼晩と1日に3食とるようになった。朝食は、セリアルに牛乳をかけて食べたり、トーストと目玉焼き、ベーコンを食べたりと、欧米化が進んでいる。昼食や夕食では多くの家族や親族が祖父母や両親、おじ・お婆の家に集まり、共食する。アザラシやカリブーの肉やホッキョクイワナを生そのまま食べたり、それらを煮込んだ料理を食べることもあるが、生協の店舗などで購入した牛肉・豚肉・鶏肉を野菜とともに調理し、食べたりすることも多くなった。なお、食生活は大きく変化したが、現時点でも地元で採捕する海獣や陸獣、鳥類の肉やホッキョクイワナなどを「真の食べ物」として多くのイヌイットが好んで食べている点を強調しておきたい。



写真4. カリブー肉とジャガイモを煮た料理 (2016年11月 岸上伸啓撮影)

僻地性と物価高

ほとんどのイヌイットの村は、モントリオールやトロント、エドモントン、バンクーバーなどカナダの主要都市から遠く離れた場所にあり、かつそれぞれの村の間はもっとも隣接している場合でも100キロメートル以上離れ、その間には道路が存在していない。したがって、生活に必要な物資はほとんどすべてカナダ南部地域から飛行機で運ぶしかないのである。

現在、生活に必要な食料やそのほかの物資は、週に1、2度、飛行機でモントリオールないしはケベック市から運ばれてくる以外は、年に1度、夏の終わりごろに貨物船が大型の機器・什器・道具類や車両を運んでくる。また、秋のはじめごろにタンカーが1年分の石油と灯油を運んでくる。このため、運送料がかさみ、村の物価は、カナダの都市部の1.5倍から2倍以上である。現在、果物や野菜、日本製の醤油やお菓子、インスタントラーメンなどさまざまな食料品を村内の店舗で購入することができるが、物価が高く、生活は楽ではない。

人口規模が1000人に満たない小さな村にも、小中高等学校や看護所、小型スーパーのような商店、村役場などの働く場所があるが、現金を稼ぐことができる職種と職数は限られている。多くの成人は村内で職を得ようとするが、フルタイムの仕事は数少なく、収入源は限られている。このため、多くの村人はパートタイムの仕事に従事したり、狩猟や漁労で食料を入手したり、家族手当や高齢者年金などの各種補助金を使用して生活の糧を入手している。中には滑石彫刻品のようなアート作品を制作する人や観光ガイドとして働く人もいる。また、女性の中には、役場や生協、学校などで20年以上勤続している人もいる。



写真5. 村役場に勤める男性 (2016年11月 岸上伸啓撮影)

社会生活と狩猟・漁労活動

かつては子だくさんの家族や、家族や親族らと同居する大人数世帯が多かったが、徐々に世帯の核家族化が進み、現在の村では一世帯あたりの同居人数が3.5人である。一方、この10年では未婚男性の単身世帯や母子家庭世帯が増加する傾向にある。アクリヴィク村の185世帯中、1人世帯は35、2人世帯が25あり、合わせると約31%に達している。

それぞれの世帯は独立した生計の基本単位であるが、日常生活では親子関係や兄弟姉妹関係などでつながっている複数の世帯から構成される親族集団(拡大家族集団)のメンバーの間で助け合いや食物分配が頻繁に行われている。したがって、拡大家族関係ないしは拡大家族集団は、イヌイットが生活する上で基盤になる社会単位として社会・経済的に重要な役割を果たしている。

私の友人のAさん(中年男性)は、特に定職を持っていないが、滑石彫刻を制作して現金を稼ぐ以外は、頻繁にカリブー猟やアザラシ猟、ホッキョクイワナ漁に出かける。Aさんの妻Bさん(中年女性)は、地元の小学校のイヌイット語教師である。この夫婦には、結婚し近所に住む長女C(3児の母)さん、同居している次女D(未婚の成人)さん、親せきから養子にとった長男Eさん(中学生)がいる。この家族の生活を紹介してみよう。

BさんとEさんは月曜日から金曜日まで朝食後、毎日学校に行く。Aさんは、ウィークデーには自宅の近くのカーピング小屋で他のイヌイット男性と世間話をしながら滑石彫刻を行う。12:00前になるとAさんは自宅に戻り家族のために昼食の準備を行う。昼食の準備と言っても冷凍したホッキョクイワナを冷凍庫から取り出すか、ぶつ切りにしたカリブーの肉などを煮るなどである。この村では昼休みになると村人は学校や職場から自宅に戻り、昼食をとる。別の家に住む祖父母やオジ・オバの所に出かけて、昼食をとることもある。Aさん宅の昼食時には、近所に住む娘Cさんとその3人の子どもたち、AさんやBさんの兄弟姉妹やオイやメイがやってきて昼食をとることが多い。

昼食が終わるとそれぞれ仕事や学校に戻っていく。そして夕方5時を過ぎると再びAさんかBさんが夕食の準備をする。夕食時も世帯のメンバーだけで夕食をとることは少なく、昼食時と同様に誰かがやってきて夕食を共にする。これにはわけがある。Aさんは腕のよいハンターであり、週末を中心に狩猟や漁労に頻繁に行くため、同家の冷凍機には大量の野生動物や鳥類の肉やホッキョクイワナが貯蔵されている。AさんやBさんの家族や親族、近所の

人はそのことを知っているために、カントリーフードを食べにやってくるのである。生魚や生肉などを食した後は、パノックと呼ばれる無発酵パンと大量の砂糖を入れた紅茶やコーヒーを飲食用する。食事の後は、談笑したり、テレビを見たりして過ごす。

夏の始めから初秋にかけての金曜日の昼休み頃になると多くの村人がそわそわし始める。これは週末に村人が日帰りの狩猟や漁労に行ったり、1~2泊のキャンプに出かけたりするためだ。春から夏の終わりにかけては日照時間が非常に長く、夏至の前後には白夜の状態が続くため、野外での活動を時刻に関係なく繰り広げることができる。夏の週末や夏休みにはAさんは家族全員で船外機付きカヌーに乗って村から数時間離れた小島に行き、そこでキャンプをしながらアザラシ猟や鳥猟を行う。秋から冬にかけては息子のEさんを連れ、イトコや兄弟らといっしょにカリブー猟や湖での網漁に出かける。

アザラシ猟やカリブー猟に他のイヌイットと行った場合には、捕獲した獲物を解体した後、その肉や脂肪部位をハンターの間で分配する。また、村に戻ると、Aさんは獲物の一部を彼の両親やオジ・オバの家に届ける。さらに、食料不足で困っている家族や親族、村人がいれば、獲物の一部を提供する。とくに家族や親族との間では獲物の分配が頻繁に行われている。他の世帯の食事に参加することや食料を家族や親族の者からもらうことによってイヌイットの人たちは自宅に食料がない時でも飢えをしのごうことができる。



写真6. 獲物のアザラシの肉を分配するハンターたち
(1999年10月 岸上伸啓撮影)

イヌイットの人たちは、この狩猟や漁労を通して地元産の食料を共食したり、分配したりすることによってみんなが必要な食料を手に入れている。したがって、家族や親族が住んでいる村にいる限りは、くいっぱぐれることはほとんどない。

ここでイヌイットの狩猟や漁労について補足説明をしておきたい。私たち日本人は仕事などで稼いだお金で食べ物や衣類を購入したり、家賃を支払ったりすることを当たり前のことと考えている。私たちは、イヌイットのハンターは捕獲したアザラシやカリブーの肉やホッキョクイワナを売り、現金収入を得て、そのお金を使って食料品などの生活必需品を購入すると考えてしまうが、現実にはほとんどの場合、狩猟や漁労は現金収入源にならない。理由は簡単で、地元産の肉や魚は売り買いせず、無償で分配するという社会慣行が行われているからである。むしろイヌイットは自らが入手した現金で狩猟や漁労に必要なライフル、その銃弾、漁網、スノーモービル、船外機付きカヌー、ガソリンやオイルなどを購入し、狩猟や漁労を続けているのである。言い換えれば、イヌイットはお金を稼ぐために狩猟や漁労を行っているのではない。逆に十分なお金がないと「真の食べ物」を手に入れるための狩猟や漁労を続けることができないのである。

現代のイヌイット社会の諸問題

現代のイヌイットはさまざまな問題に直面している。ここでは、イヌイット社会における若者の自殺の問題と気候変動の問題の2つを取り上げたい。

死に急ぐ若者

2011年と2016年間のカナダでは先住民の自殺率は非先住民の約3倍である。その中でもイヌイットの自殺者は10万人中72.3人であり、非先住民の自殺率の約9倍である。イヌイットの14歳から24歳までの若者の自殺率が突出して高い。なお、北西準州、ヌナヴト準州、ヌナヴィック（ケベック州北部）地域、ヌナチャウト（ラブラドル）地域のイヌイットの間では自殺率が異なる上に、村ごとにも違いが見られる。

私の調査地であるヌナヴィック地域の村でも毎年、自殺者や自殺未遂者が出ている。私が親しくしていた古老Xさん（男性）に10歳代後半の孫（少年）Yさんがいた。XさんはYさんを大変にかわいがり、小さい時からいつもアザラシ猟やカリブー猟、ホッキョクイワナ漁に連れて行っていた。YさんもXさんの手助けをできるぐらいになった。私たちはYさんが狩猟や漁労に従事する健全な青年に成長したと感心していた。しかし、Yさんはある日、突然、彼の自宅の納屋で首をつり、自殺した。XさんをはじめYさんの両親や兄弟姉妹、友人はだれもYさんの自殺の理由を思い浮かべることができず、ただただ驚き、嘆き悲し

んだ。Xさんはあまりの悲しみのために意気消沈し、周りの人々を大変に心配させた。さらに悪いことに、Yさんの大親友Zさんが後追い自殺を図った。Zさんは幸いに一命はとりとめたが、精神的に後遺症が残り、体の震えがとまらず、苦しい日々を送ることになった。このような事件が、人口650人程度の村で頻発すると、その住人に及ぼす影響は計り知れない。イヌイットの村に1か月以上滞在すると、他のどこかの村で自殺や自殺未遂が起こったという話を耳にする。ガールフレンドと別れた若者、大親友を失った若者、何らかの理由で生きることに興味を失った若者らが、酒の勢いを借りて自殺を試みる人が多いようだ。

村内の学校や村役場、教会の関係者が外部の専門家と協力して、必死になって若者の自殺防止のための活動を行っているが、抜本的な解決には至っていないのが現状である。

温暖化がもたらした苦難

1990年代以降のカナダ極北地域は、温暖化という地球規模の影響をもちに受けている。その影響は年々、拡大しているように思える。温暖化の典型的な状況は、沿岸の海水の結氷が遅くなり、かつ海氷原が融けて消え去る時期が早くなったことである。このことは、動物やイヌイットに対してさまざまな影響を及ぼす。たとえば、冬季の海氷原の海際はワモンアザラシやアゴヒゲアザラシが春に子供を産み、育てる場であるが、温暖化の影響でその場所が例年よりもかなり早い時期に融け去り、アザラシ類が子どもを育てることができなくなった結果、その総数が減少した。そうするとアザラシ類を餌としているホッキョクグマは食料不足に陥り、ホッキョクグマの数も減ってしまうとともに、やせ細ったホッキョクグマが食べ物を求めて人間の住む村の周辺に頻繁に出現するようになった。アザラシ類もホッキョクグマもイヌイットにとってはそれらの肉と脂肪は重要な食料資源であるとともに、毛皮は防寒用衣服や靴、手袋などの素材になる。さらにそれらの毛皮は販売することができ、現金を稼ぐこともできる。このためこれらの動物の減少は、イヌイットの生活に悪影響を及ぼしているのである。

私の友人たちは、気象が予測できないことで困惑している。極北地域の気象の特徴は、涼しく、雨の少ない夏と厳寒の冬が毎年交互に現れることである。しかし近年は、暑い夏や雨が多い夏、異常に涼しい夏、温冬、極端に寒い冬が突然やってくる。また、いつもと異なる方向から風が吹いてくることもある。言い換えれば、予測不可能な気象状

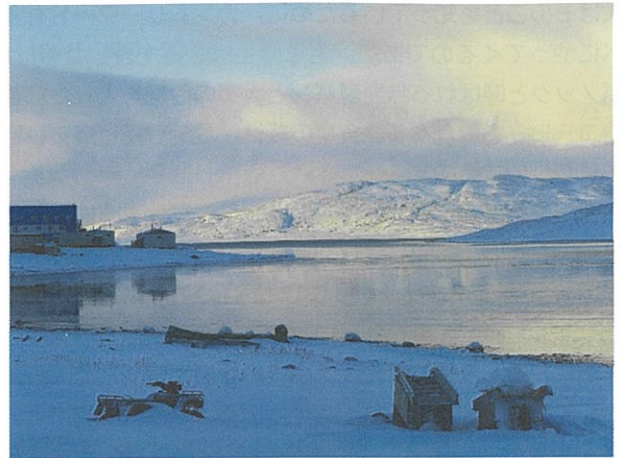


写真7. 11月末になっても結氷しないアクリヴィク村の湾内
(2016年11月 岸上伸啓撮影)

況が発生した結果、アザラシ猟やカリブー猟に出かけることが難しくなることや不猟に陥ることがあり、イヌイットの狩猟活動に悪影響を及ぼしている。

海氷原の結氷の時期が遅いことや融解時期が早いことによってスノーモービルを利用できる期間が短くなった。また、海氷原の結氷期や融解が進む時期には氷原の状態が以前よりもはるかに不安定になった。もう10年も前の話だが、友人に腕の良いハンターがいた。彼は、春に海氷原上でのアザラシ猟にスノーモービルに乗って出かけたが、その日は濃霧が発生したらしい。彼は熟練で慎重なハンターであったが、村の近くの海水が薄くなった場所でスノーモービルごと海中に落ち、帰らぬ人となった。別の悲劇を紹介しよう。数年前には、私の友人の娘夫婦とその子供たちが春に湖氷上での魚釣りに出かけて行った。湖氷上に穴をあけ、そこに釣り糸を垂らして魚を釣っていたが、突然、湖氷上に大きな亀裂が走り、その夫婦が海中に落ちてしまい、近くにいた人々による必死の救助活動にもかかわらず、死んでしまうというアクシデントが起こった。このように地球温暖化は、イヌイットの人々に予期せぬ影響をもたらしているのである。この事件をある村人のフェイスブックで知った私はにわかには二人の逝去を信じることはできなかったが、グローバル化が急激に進み私たちと同じ便利な道具や機器を使用している現在でも、大自然の中で暮らしているイヌイットは危険と隣り合わせながら生活を営んでいるという事実を思い知らされた。

変化するイヌイット社会

極北地域のイヌイットの村での生活には良い面と悪い面がある。良い面は、同じ場所に家族や親族の多くが住んでいるために、お互いに助け合いながら生活を営むことがで

きる。一方、小規模な村であるため、就職口が限られていることに加えて、高等教育や十分な医療サービスを受けることが難しい。さらに、人間関係がうまくいかなかったり、暴力事件や自殺問題などが発生したりするとそこに居づらくなる。このような状況のもとで、1980年代から極北地域のイヌイトの一部の人が、イカルイトやイエローナイフ、クージュアックのような極北地域にある大きな町やオタワやエドモントン、モントリオールなどのカナダの都市地域へ移住するようになった。

2016年の時点でカナダ・イヌイトの総人口の27.5%にあたる約1万8千人が極北地域以外の地域で暮らしている。都会で成功したイヌイトもいるが、ホームレスになる人も多く、経済問題や社会問題、健康問題、差別問題などに直面している。かつては故地のイヌイトと故地を離れたイヌイトの間では連絡を取ることが難しく、家族・親族関係を維持することも難しかったが、1990年代後半以降に携帯電話やフェイスブックのようなSNSが急速に普及したため、どこに住もうが家族や親族、友人と頻繁に連絡を取ることができるようになった。このため、イヌイト間の社会関係は活性化し、維持されるようになった。さらに都市においてもイヌイトの社会的ネットワークが形成されつつあり、新たな都市イヌイト文化が出現しつつある。

グローバル化の進展とともにイヌイト社会は大きく変



写真8. モントリオール在住イヌイトの夕食会 (2004年8月 岸上伸啓撮影)

わり続けている。かつて極北の狩猟民として知られていたイヌイトは、今や故地のみならず、オタワなどカナダの南部やそれ以外の地域に移り住み、生活を営んでいる。このため、イヌイトの生活様式も多様化し、経済格差も広がりがつつある。その一方で、PCやスマホなどの新しい通信手段を利用して、連絡を取り合うことによって、家族や親族が遠く離れた所に住んでいても関係を維持したり、助け合ったりしており、イヌイトとしてのアイデンティティを持ち続けている。このように現代のイヌイト社会には変化と持続が同時進行している。

(2022年11月24日受付)

日本極地研究振興会 研究・教育助成課題決定のお知らせ

当財団のホームページ、および「極地」115号でご案内した2022年度の「研究・教育助成」募集に対し、3件の応募がありました。6名から成る助成先選考委員会において検討した結果を理事会へ報告し、次のお二人の課題に対して助成金を授与することと決定しました。

- 1) 太田紗世氏 (グリーンランド大学文化社会歴史学科 Guest Student) : グリーンランドのピース史 ―日本とグリーンランドを繋ぐピース (2023年6月21日前後の1ヶ月間にフィールドワーク) : 20万円
- 2) 中嶋千夏氏 (筑波大学大学院生) : 北極圏に位置するアラスカ・ミドルトン島で繁殖するウトウとエトピリカにおける水銀汚染状況 (2023年4月~8月にフィールドワーク) : 20万円

この公募は、当財団の「助成金交付規程」に従って、

本年は9月1日から11月末日まで、翌年度実施する計画の申請を受け付けます。応募者の資格は国公立大学、国公立および民間研究機関、高専、小中高等学校等に所属する研究・教育に従事する方で、年齢、性別は問いません。助成は、海外での国際会議や学会参加、現地調査活動、国際会議の国内開催、研究成果の普及・アウトリーチ活動、青少年教育など、極地の研究・教育の発展に資する活動を対象とします。助成金額は、1件あたり20万円を限度とし、採択件数は「若干」としていません。申請課題の採否は「独創性」、「計画性」、「発展性」、「必要性」の観点から、財団に置かれた選考委員会の議を経て、理事会で決定します。

本年も公募するので、奮ってのご応募をお待ちしています。詳しくは当財団の「助成金交付規程」をご覧ください。

